第十四回 子どもノンフィクション文学賞
選考委員特別賞【最相葉月賞】受賞

仲間と共に

～28人の努力、甲子園への切符～

盈進中学校二年　佐伯 皆人

CITIZEN
鶴岡東
盈 進
UMPIRES
第一試合
第二試合
第四試合
Iwatani
水素
三井住友銀行
MITSUBISHI ELECTRIC
オーロラビジョン

LAWSON
川上塗料
伊藤ハム
日新火災
大日本塗料
黄桜
白鶴
ホテルニューアワ
EISHIN

九つの人九つの場をしめて

ベースボールの始まらんとす　（正岡　子規）

今年没後一二〇年を迎える明治の俳人正岡子規が大の野球好きだったことはよく知られている。幼名「升（のぼる）」をもじった「野球（のぼーる）」という雅号を用いた子規はアメリカより伝来して間もないその球技に大いに魅了されていたようだ。野球伝来から一五〇年を迎える今年、甲子園球児のヘルメットにはそれを記念するステッカーが貼られていた。今や国民的スポーツとして老若男女から愛される野球。とりわけ高校野球に対する人々の熱量には目を見張るものがある。

二〇二二年八月七日。僕は兵庫県西宮市にある甲子園球場のアルプススタンドにいた。青い空にくっきりと浮かぶ夏雲。黒土と緑のグラウンド。そしてスタンドを埋め尽くすスクールカラーのえんじ色。強烈な色のコントラストが十四歳の僕を圧倒した夏だった。

甲子園、それは言わずと知れた高校野球の聖地である。全国十三万二五九人の高校球児（日本高等学校野球連盟令和四年統計）がしのぎを削り、全国の高等学校三五四七校（今大会）の頂点目がけて熱戦を繰り広げる。各校の甲子園のベンチ入りは一八人だから、実に０・６７％の確率でしか立てない舞台に僕たちの先輩がいる。その夢のような光景は今も僕の脳裏に焼き付いて離れない。

この夏、盈進高校は全国高校野球選手権広島大会において八三チームの頂点に立ち、見事甲子園への切符を手にした。ノーシードで臨んだ一回戦からの全七試合で先制を果たし、リードを一度も許さない試合運びは地元福山を含む県東部を沸き立たせた。それもそのはず、古豪と呼ばれる盈進高校の甲子園出場は一九六〇年、一九七四年に続く実に四十八年ぶりの待ちわびた快挙だったからだ。

中学二年生の僕は、今、盈進中学校軟式野球部でピッチャーをしている。新チームに代わり部員は十人と少ないが、仲間と励まし合いながら練習に取り組む毎日だ。そんな僕たちの自慢は高校の先輩たちと同じデザインのユニフォームに身を包んでいるということ。普段は高校野球部が使用している野球場と隣接した雨天練習場で練習し、先輩たちが球場で練習する姿をネット越しにずっと見てきた。泥だらけになりながらボールに喰らいつく選手や、監督の叱咤激励を受け一層気を引き締めて取り組む選手の姿を見ると、甲子園への強い思いが伝わってくる。だから先輩たちの甲子園出場は僕にとっては自分のことのように嬉しい出来事であり、実際に甲子園球場に足を踏み入れた瞬間のあの感動は忘れることができない。

この夏の感動を記録に残し、野球が大好きな自分自身の糧としたい、これが、今僕がこの文章を書いている最大の動機である。何が彼らを甲子園に導いたのか、先輩たちの強さの秘密を探りたい。彼らは甲子園という場所で何を感じたのか、先輩たちの思いに触れたい。僕はそんな気持ちで高校野球部員の三年生二十八人全員にインタビューを申し込んだ。この文章はその取材において一人ひとりが語った「高校野球」というものを僕なりに整理したものだ。

それではプレイボール！

❖なお文中、文章のリズムを重視して、尊敬する先輩たちの名前に敬称を用いていない箇所がある点を予めおことわりしておく。

チームの要〜キャプテンの役割〜

コロナの蔓延防止のため、直前で入場行進がキャプテンだけになった。そこで広島代表の優勝旗を持って一人で堂々と行進したのが朝生弦大だ。プラカードを持って行進する女子生徒の姿で見えなくなってしまうような小さな巨人だが、その姿はチームの誰からも必要とされる唯一無二の存在感を放っている。

朝生選手について尋ねたとき、部員たちは声を揃えてその人間性、とりわけ人への接し方において彼の右に出るものはいないと語る。周囲への気遣いが素晴らしく、何があっても相手を傷つけないように一緒に解決しようと動いてくれるのだ。どんなに小さなことでも、発言には細心の注意を払っている。メンバー以外にも、それがたとえ後輩であっても分け隔てなく

「ありがとう」を言えること、朝生が誰からも愛されている理由だ。

それだけではない。リーダーとしての自覚が強く人の前に立つ機会も多い分、その裏では準備を怠らない姿をメンバーは見ている。全体練習を終えても三十分間残って最後まで個人練習をする姿、試合に出発する前の道具の準備は前日に全員で、帰りがけにマネージャーがおこなうことになっているが、当日朝、朝生がもう一度おこなう姿。そんな地道さの積み重ねが、「キャプテン朝生」を作ったと言えよう。

五月の終わりの練習試合においてホームへヘッドスライディングをした際、右膝の後縦靭帯を痛めた。直後の診断では一週間程度と言われたのだが、その痛みは夏大会、最終的に甲子園まで尾を引いた。キャプテン且つ不動の一番バッターが大事な場面で試合に出られない、そのことは朝生にとってもチームメイトにとっても大きな痛手だったはずだ。しかし、彼のすごいところはここでくじけなかったことである。選手たちに声をかけ続けチーム全体に目を配ることを怠らなかった。

「甲子園には俺たちが連れていくから、今は休んでいろ」――同じポジションで試合に出ることになった梶岡航士朗のこの言葉は、責任感の強い朝生にとって大きな励みになったという。

チームメイトが認める朝生のキャプテンシーについて、硬式野球部佐藤監督もこんなふうに語っている。

「(このチームは)まさに、朝生のチーム。恐ろしい人間力です。困った時に彼が出ると、車なら給油ランプがついているところから真ん中辺りまで燃料が入る感じ。」(デイリー・スポーツ二〇二二年七月二十七日朝刊)

広島大会準決勝まですべての試合で三塁コーチを務めた朝生は、決勝戦で同点に追いつかれた八回表という局面で打席に立った。湧き立つスタンドの期待に応える形で渾身の一打を放った瞬間を僕も鮮明に覚えている。チームはここから一気に五点を加点し、広島大会優勝へと漕ぎつけたのである。

チームの要であるキャプテンの人間性は間違いなく甲子園出場の大きな理由の一つだと思う。とりわけその平等性を重んじ、時に自らの犠牲心で和を尊ぶ精神は仲間たちの心を一つに束ねる上で欠かすことのできないリーダーシップを発揮したはずだ。

ピッチャー〜背番号1をめぐって〜

「背番号1」。チームを牽引する称号であるエースナンバーが高校野球において果たす役割にははかり知れないものがある。

佐々木大和は一年生の頃から数々の公式戦で登板してきた。陸上の指導者でもあった父親のトレーニングのもと、高校入学時には鋼のようにしなやかな身体の原型ができていたという。奪三振率の高いキレのあるストレートを武器に強打者に立ち向かう存在は、チームメイトにとっても「こんなピッチャーがいたら、俺たちは(甲子園に)行ける」と思わせる程頼れる絶対的エースそのものだった。

そんな投手陣を牽引する佐々木にとって忘れられない試合が二つある。一つ目は一年生の秋、広島県二位で勝ち上がった中国地区大会の初戦、関西高等学校(岡山)との対決。七回ワンアウト一・三塁のピンチで登板、延長十三回のタイブレークまでもつれる死闘を制し、七対六で勝利した試合だ。苦しい試合が終わった直後、ポーカーフェイスを意識してきた佐々木の目にも思わず涙が溢れ出た。そんな時佐々木の先輩たちが「お前のおかげだ」と声を掛けてくれたことは今でも心に刻まれている。

佐々木が自身のライバルとして名を挙げるピッチャーがいる。岡謙介。一年生の頃からずっと佐々木と一緒にレギュラー争いを続けてきた。彼のことを語る上で欠かすことのできない試合は一年生秋の三次高校戦だろう。一年生ながら先発を任されたことが嬉しく、そして投げ切る自信もあったという岡の思いに反してまさかの初回四失点降板。チームは八対七で辛うじて勝利したものの、自分の力不足が情けなく、それ以上に先輩たちにも迷惑をかけてしまったことでメンタル崩壊をきたした岡。二日後の練習でもそのショックを引きずり続け、監督から檄を飛ばされるという何とも苦い経験だ。しかしそんなときも先輩や同級生たちは彼を励まし続けてくれた。「今の自分があるのはあの試合のあとみんなが支えてくれたからだ」と笑顔で振り返る。

佐々木の忘れられないもう一つの試合。それは二年生秋の広陵高校戦。

途中から登板し甲子園常連校相手に一点リードで迎えた最終回、代打のホームランを浴びた流れで逆転負けを喫した。その後広陵は中国大会を制し、神宮大会では準優勝。そのままトントン拍子で春のセンバツへの切符を手にすることになるのだが、自分たちのチームを変えたターニングポイントになった試合として、この試合のことを思い起こす選手は多い。一瞬の気の緩み一点の重みを、それぞれの悔しさで強く記憶に残すことになった一戦だ。

佐々木・岡のエース争いかと思いきや、実際甲子園の舞台でエースナンバーを背負ったのは向井勇だった。もともと外野手だった向井は夏大会直前で調子を崩していく佐々木とは対照的な伸びを見せ、チームを甲子園に導く立役者となった。怪我も多く、メンバーを外れることも多かった向井が野球をやめずに続けることができたのは母親の存在が大きいという。

向井が小学二年生の頃、母親が仕事先の機械に手を挟む大事故に遭った。機械ごと病院に搬送されたが右手の指をすべて失ってしまったのだ。大好きだったバレーもできなくなり体調不良の日々が続く中で、それでも試合を見に来てくれたりお弁当を作ってくれたりした母親。「お母さんの笑顔が見たい」、その一心で彼は野球に打ち込んだ。「盈進の野球部は全員いいピッチャー。そんな中で自分には何があるか考えたとき、スピードでは勝てないからコントロールと変化球をもっと磨いてレギュラー争いに勝ち抜きたい」。このまっすぐな思いの向こうにはいつも母親の笑顔があった。彼を甲子園のマウンドに立たせた大きな原動力である。

一方の佐々木は、夏大会直前にスランプを迎えそれまで不動の背番号1から11へと変更。ライバル視してきた岡ではなく、外野手だった向井がピッチャーをすることに大きな衝撃を受けたという。特に甲子園球場にはそれまで仕事の都合で応援に来てもらえなかった母親が来てくれていて、1イニングだけの登板しか見せることができなかったことは大きな心残りであるという。

それでも佐々木は大好きなメンバーとして向井の名を挙げる。「寮でも同じ部屋。朝夕の食堂にも一緒に行く。キャッチボールの相手も向井だし、映画も一緒に見る」。四国の独立リーグに入団し、プロを目指す佐々木と大学に進学し野球を続ける決断をした向井。次のステージを見つめる二人には、さらに強い絆が育まれつつあるようだ。

ここでエースナンバーを巡る三人の投手について記したが、野球部にはまだまだ多くの控え投手が存在する。今中学野球部でピッチャーをしている僕にとってはどの選手の話も心に刻まれるものばかりだ。これについてはのちほど記すことにする。

つなぐ打線❶〜最強のバッター陣〜

今夏の広島大会の全ての試合で先制点を挙げている盈進打線。そんな強力打線の中軸を担う選手たちはどんな練習をしてきたのだろうか。不動の一番、朝生弦大については前述したので、以下打順二番から話そう。

二番　鶴田海斗

もともとピッチャーとして入学してきた強肩の鶴田は、二年次の秋の大会高陽東高校戦においてレフトからのバックホームでランナーを刺殺しピンチを切り抜けた経験を持つ。監督からも「こういう時にやってくれる」と褒められたことで続く広陵高校戦でホームランを打つなど大活躍。寮生活でも練習後の学習を夜中まで続ける勉強家で、成績はオール5。周囲からは「すごいことをやっているのにすごいと思っていない」と評価される謙虚さが光る。

三番　秋田浩侑

秋田は監督曰く「一番ワイルドな選手」だそうだが、実際には監督から最も厳しい指導を受けた選手の一人だった。それはまさに「立っているだけで注意される」ほど厳しいものだった。二年生の秋の大会でベンチ入りメンバーから外され、本気で野球部を辞めようと監督へ申し出るセリフまで考えたそうだ。しかし、自分を応援してくれる家族や地元の人たちの期待に応えたいという思いがそれを押しとどめさせた。三年生春の大会でレギュラー入りを果たし、そこで監督から「今まで散々厳しく指導されてきたから、あとは楽しんでいいぞ」と言われたことは忘れられない瞬間だ。広島大

会で打率六割越えをマークした強打者の勝負強さは、監督の戦略通りに鍛えられたメンタルによるところが大きいと思われる。

四番　杉浦和宏

一年次から試合に出場し、トップレベルの技術力を誇る杉浦。愛称スギ。夕食後の個人練習でも一番遅くまでバッドを握り、黙々と練習に励む姿は、「盈進の四番」を背中で語るバッターであった。「スギがいるから大丈夫」、という安心感を与えるチームの大黒柱的存在の杉浦も、しかし甲子園という舞台は特別な場所だった。セカンドベースとサードベースの間でランナーを挟んだ際、深追いしすぎてアウトを取ることができなかったのである。「まさかスギがあんなプレーをするなんて」――序盤の大量失点を招くきっかけとなったプレーはチームを明らかに動揺させた。さらにそのミスをバッティングで挽回しようとするも、焦りから〝空回り〟。「自分の幼稚さを痛感した。周りを見ることができていなかったことに気付かされた。」これまで試合に負けて泣くことなどなかった杉浦の大粒の涙は後悔の涙だったという。四番でよかったか、という僕の問いに「四番という打順は、自分にできることは何かという問いを常に自分に投げかけてくれた。だから四番という立場が自分を成長させてくれたと思って感謝している」と語る杉浦。そこで僕は気づいた。だから、この選手が四番なのだということに。

五番　山藤龍希

俊足強打の選手として広島県決勝大会では先制点を挙げる内野安打、甲子園においても二塁打二本と犠牲フライで計三打点の大活躍。そんな山藤を周囲は「バッティングに対する向上心がすごい。いつ見てもバットを持って素振りをしている」と評する。寮の点呼は朝六時だが、それより前から素振りしている姿を多くの選手が知っているのだ。五月の終わりフルスイングをした際に右手のひらを骨折した山藤は痛みをこらえながらバットを振り続けた。大舞台での活躍の裏には一本を捻出するための努力を惜しまないひたむきな選手の姿があった。

六番　中島知寛

甲子園ではチーム初打点となる右中間三塁打を放ち、五打数四安打二打点という華々しい結果を残した中島。「ああいう大舞台ではやってきたことしか出ない」という監督のことば通り、バッティングゲージの中で一打一打悩みながら「考える」野球を続けてきた成果が最後に花開いた。

同じ理系で勉強も野球も両立する「四番杉浦」の背中をずっと見続け大きく影響を受けた。寮生活を選んだのは二年生の三月。学校の行き帰りの時間をバッティング練習に充てたいと考えた上での決断だった。そこからは寮の点呼ぎりぎりまでバットを振り続け、ようやくレギュラーに定着するようになったという。それでも夏の県大会が始まる前最後の練習試合、開星高校（島根）戦の前までは二十打席ノーヒットに苦しんだ。杉浦と一緒におこなった前夜の自主練習では、二人で山に向かって「打ちたい！」と大声で叫び、無心でバットを振りまくったそうだ。その結果小学一年生で野球を始めた中島から人生初のホームランが飛び出すというスランプ脱出に成功したのである。

阪神ファンでもある中島にとって甲子園という舞台は人一倍特別な場所だった。でもそこで結果を残すことができたのは一打一打で悩み、それを仲間と共に乗り越えようとし続けたからだ。「自分一人では絶対にできないことが、このメンバーだからできた」。このチームはどのチームより強いと中島が確信する理由は、仲間への信頼と彼らとの絆にある。

八番　西本翔清。

中学時代はキャプテンの朝生と同じクラブチームに所属していた。長い期間Aチームに入れず、同級生たちの活躍を横目に、守備やバントの精度を高めるための練習を重ね続けた。最後の最後にレギュラーを掴み取った「努力の人」である。そんな西本の象徴的なプレーがある。夏の広島大会決勝、西本のエラーで同点となってしまうも、その直後センターに抜けそうな打球をスライディングキャッチするという見事なファインプレーだ。勝ち越されなかったこと、自分のミスを自分で取り返す意地のプレーこそ西本の野球の真骨頂とも言える。自分が出ない試合にも応援に来続けてくれ

た両親への感謝の気持ちがこうしたプレーに結実しているはずだ。

❖七番バッター奥信へのインタビュー内容は捕手の選手のエピソードとして後述する。また、九番バッターは前述した投手陣となっている。

つなぐ打線❶〜控えメンバーの思い〜

ここまでのバッターはいわゆるレギュラー陣で、入学後、一年生のときから目立った活躍を見せてきた選手が多い。もちろんその座を掴み取った背景には、彼らのたゆまぬ努力があるはずだが彼らの影日向となってきた選手の存在があったことも間違いない。ここではチーム力に直結する選手層の厚みを生み出した、控えメンバーたちの思いにも光を当ててみたい。

甲子園では西本に続いて六回から出場したセカンドの平塚颯太。内野全般を守ることができるユーティリティが持ち味で、チームの作戦に幅を生み出す遊軍である。もともと正遊撃手の秋田より前にショートに入り、レギュラーを譲り渡す形になったが、「秋田が抜けても平塚がいる」「平塚がいるから秋田が生きる」と言わしめるほど、チームの安定剤的存在になった。

そんな平塚を高く評価するのが、前述したキャプテン朝生選手の穴を埋めた梶岡航士朗である。広島大会決勝尾道高校戦で先頭打者ヒットを放つなど、「ここ一番で打ってくれる」存在として打率以上のものを残した選手だが試合には出られなかった時期が長い。スタメンでレフトを守った秋のリーグ戦でランナー満塁の際にまさかのフライを落とす苦い失態以後、スタメンを外されたのである。本気で野球をやめようと悩んでいたとき、自分同様レギュラーを外された平塚の姿が目に飛び込んできた。誰よりも夜遅くまでバッドを握って練習に打ち込むひたむきな仲間がいる一念発起した梶岡は苦手意識の強かった守備練習に一層打ち込んだ。最後に勝負強さを発揮するその精神力は仲間の姿によって覚醒されたものだと言えよう。

西野楓生。外野全般を守ることができ、さらに強肩で俊足という守備の名手である。レギュラーを掴むため与えられたチャンスで結果を出そうと、質・量ともに考え抜いた練習を重ねてきた。マネージャーに頼んで後方からバッティングを見てもらったり、動画を撮って監督にもアドバイスを求めに行ったりするほどの熱心さが際立っている。入学直後の紅白戦でセンターの守備についていた西野はゴロを二回連続でトンネルするという失態でポジションを失った。バッティング以前に守備と走塁ができなければメンバー入りは不可能だと悟り、それから守備の猛練習に励んだという。

梶岡は言う、「このメンバーは、チームの中でも同じような境遇に置かれていたメンバーである。チャンスを与えられてもそこで力を発揮することができずに悔しい思いをたくさん味わった。試合に出られなくて苦しい時期もあったし、正直やめたいと思ったことだって何度もある。でも、このメンバーだからやってこれたという思いがそれぞれにある。野球には仲間のために自分を犠牲にするという場面が多くあるが、その役割を果たすことができたのは、やっぱり仲間のおかげ。」

そんな梶岡のひたむきな姿をキャプテンの朝生も見ていた。自分がケガで出場できなかったときに梶岡がどんどん上手くなっていく姿を見て「あいつより練習量では勝とうと思っていた。少しでも長くグラウンドに残って練習をすることに決めていた」という。お互いがお互いを認め、それを超えようと必死になっている関係がチーム内のあちこちにある選手たちに話を聞けば聞くほど、そうした相乗的な成長要因の存在が見えてきた。

縁の下が認める「縁の下」

さて控え選手たちのインタビューをおこなう中で、彼らが口を揃えて「尊敬する仲間」として挙げた人物がいる。それが新谷済だ。

中学時代からキャッチャーをしていた新谷。野球において「扇の要」と称されるほど重要なポジションを担う人物はコミュニケーション能力に長けたチームのムードメーカー的存在だ。常に周囲に気を配り、どんな人にも分け隔てなく話しかけ、場を和ませる。盈進野球部の中心人物であり、なおかつ学級でも率先して仲間をまとめるオールマイティさはチームメイトからも一目置かれている。

その新谷が「人と接する時に態度を変えることなく、誰とでも仲良く

できる。試合でも一番声を出していて野球以外の場面でも好かれる人物」と絶賛するのが奥信武憲。広島大会、そして甲子園で正捕手として活躍した選手である。キャッチャーというポジションを巡って切磋琢磨した二人は高校三年間同じクラスに所属し、お互いを親友と呼ぶ関係にあったのだ。

奥信はチームの中でも特に監督から厳しい指導を受けてきた選手の一人だ。些細なことでも理不尽に指導を受けるので、そうならないようにプレーをしたことが逆にプレーを小さくしたり、ミスに繋がることもあったと振り返る。監督が自分に厳しく接する理由について奥信本人は「自分はレギュラー陣の中でも身体能力が高い方ではない。だから声だけは誰よりも出してきた。監督は厳しく当たることができると思った人にしかそうしない」と分析する。監督の指導を受ける際も、監督の話が終わっていないうちから食い気味に返事をするほどの向こうっ気の強い奥信だが、実際は放課後が近づくにつれて、今日の練習も怒られるのか…とお腹が痛くなり始めたそうだ。声出しだけでなく、練習量と練習時間はナンバーワンだとチームメイトからも認められるほど、監督へのアピールをし続けた奥信への檄は、監督からの愛の鞭だったに違いない。

そんな奥信の野球人生で一番大きな出来事はキャッチャーへのポジション転向だった。入学時点ではサードをしていたが、怪我をした先輩の穴を埋めるべくショートへコンバート、その後ファーストも一年間ほどやってみたが、どうやってもしっくりこない。なかなか自分に合ったポジションが定まらない中、山藤や佐々木の勧めもあって新チームの初日にキャッチャーを志願する旨を監督に伝えたそうだ。

もちろん奥信はキャッチャーへの転向を親友の新谷に事前に伝えていた。その時のことを新谷はこう振り返る。「奥信がキャッチャーをしようと思うと言ってきたときは、ポジション争いに負けないように、自分が頑張ればいいだけだと素直に思った。でも元々四人いたキャッチャー陣の中に最後に飛び込んできた奥信が着々と実力をつけ起用される姿を見て、自分はここまで長くキャッチャーをやってきたのに…という思いが生まれたのも事実だ。奥信がミスをした時は、自分だったらできていたかも…とも思ったことだってある。でも奥信は『(新谷)済に追い越されたくないから、とにかく練習した』と正直に言ってくれるし、自分がマスクを被ったときは、試合の中で気づいたことを惜しみなく教えてくれた」。

新谷は奥信を一番の親友だと断言する。チームの中では声出し担当、ムードメーカーというキャラクターが似ていたこともあるし、何より奥信が中学時代の親友にそっくりなのだという。チームメイト全員と仲のよい奥信だがチームの中に腹を割って何でも話せる存在がいたことは大きかったと語る。

キャッチャーとして飛躍的に頭角を現す奥信に対して新谷は、三年生の二月、肘の靭帯を損傷し、治療に半年かかるという診断を下された。夏大会に間に合わない自分はサポートに回るべきかどうか監督に相談すると意外にもまずは治療に専念するようにと指示された。八十人近い部員を三十人に絞る最初のセレクションも通過し、まだ野球ができることの喜びも感じたが、やはり夏の地方大会のベンチ入り二十人には入れなかった。その発表の直後、新谷は監督に呼ばれ、そこで「応援団長」を任命される。これから始まる夏大会で応援を取りまとめ選手を鼓舞する大役に抜擢されたのである。

高校野球において、「サポート」の果たす役割は大きい。夏大会が近づくにつれ、徐々にメンバーが絞られ、最終的にベンチ入りの二十名が確定すると、外れた約六十名は「サポート」メンバーとなる。自分たちの練習時間を削って二十人の選手たちのための環境づくりに徹するのだ。その中でも特に応援を取りまとめる「応援団長」は試合において選手が力を発揮できるような応援体制を整えるという重要な任務である。新谷はベンチ入りのメンバーからは外れてしまったが、この任務を与えられたことに大きな誇りを感じたという。

選手たちは新谷の姿をよく見てきた。「最後まで諦めない精神力はチーム1」(西野談)「結果が出なくても努力できる、ずば抜けたメンタルの強さ」(西本談)「新谷もやっているのに自分がやらなくてどうすると思ってきた」(平塚談)「誰よりも悔しかったのにみんなを引っ張ってサポートしてくれた。新谷のために勝たんといけんと思ったことが何度もある」(梶岡談)

新谷は仲間たちを思い、献身的にサポート役を務めた。甲子園入りしたチームメイトに向けて動画メッセージを送るなど、ユーモアも忘れない応援団長の思いに応えようと、選手たちは心を一つにしたのである。

高校野球を終えた夏休み、校内の学習スペースには新谷と奥信が二人で勉強する姿があった。甲子園から帰って一日だけ休んだ二人はすぐにそれぞれの進路に向けて受験勉強を始めたのだ。同級生の仲間たちからは少し遅れをとっていたが、高校野球で磨き上げた精神力は誰にも負けはしない。キャッチーポジションを競い合った親友の二人は、このあとそろって希望する国公立大学への進学を決めることになるのだから。

まだまだいる「縁の下」の存在〜投手編〜

寺田大和。盈進中学校出身で僕が所属する軟式野球部の偉大なる先輩だ。主に中継ぎとして先発投手の後を繋ぐ重要な役割を担う。寺田と言えば広島大会準決勝、誰もいない一塁へ牽制球を投げたという伝説的なプレーが記憶に残る。前代未聞のミスに内心「そのまま帰りたかった」と漏らす寺田であったが、ファースト中島の「俺がベースに入れなかったのが悪い。予測できなかった俺のせい」という一言に救われたという。しかし、このプレーが実はチームの緊張感を和らげ、のびのびと戦えるきっかけになったことは、その後の試合展開が物語っている。

花岡航大。試合に出られなかった期間の方が長く、同級生が試合でプレーする姿を見て悔しさを感じ続けたという。登板機会に恵まれなくてもベンチの中を明るくしようと率先して声出しをしていた花岡にある時仲間の一人がこんな声をかけてくれた。「お前が(ピッチャーとして)こんなに投げられるようになるとは思わなかった」。自分の成長を認めてくれる仲間の存在に気付かされた瞬間だった。

佐藤涼生。ピッチャーで新チームには一人しかいないサウスポーであったため、ワンポイントとして試合に登板する機会もあった。二年生の途中までは遠征にも帯同していたが、結果が出ずに苦しい時期を迎えメンバーからも外れてしまう。悔しい気持ちはもちろんあったが「頑張っている仲間が右にも左にもいる。チームの目標である甲子園に自分は出られなくても仲間には出てほしい」という気持ちが芽生え、バッティングピッチャーやマシーンのボール入れを率先して買って出た。

平松拓真。俊足で「冬練の平松」という異名を持つほど冬季のランメニューでは仲間たちを引っ張った。しかしプレーにおいては周囲に置いていかれることもしばしば。同級生たちにできて自分にできないことはない、と歯を食いしばって練習に耐えた。夏大会のメンバー発表後「越えるにはどうすればよいか」と常にライバル視してきたレギュラー陣たちへの目線が「甲子園に行かせるにはどうすればよいか」というものに変わったという。チームメイトの存在の大きさを思い知らされるエピソードである。

椿博翔。授業中にうっかり居眠りをしたりする姿が監督や部長の耳に入ると、「そんなんじゃ野球部員として認められない」と厳しく指導された。でも一つ、野球が好きという思いは持ち続けてきたからこそ仲間たちにと一緒に最後まで続けることができたという。特にピッチャーというポジションは、バッティングピッチャーや後輩たちのバッティング練習の際のピッチャーとして自分以外の仲間たちや次世代の育成に役立てる場面が多く、チームのために高校野球を続けた三年間だったと自負している。

まだまだいる「縁の下」の存在〜野手編〜

竹邉大祐。小さな身体から繰り出される球筋には勢いがあり、夏大会メンバー選考の三十人に入るほどの実力の持ち主だったが、最終的にベンチ入りメンバーから外れた。最後に自分の力を出せなかったこと、これまで応援してくれ両親や野球でお世話になった方々の期待に応えられなかったことは本当に悔しかった。しかし甲子園に立つメンバーの姿を見て「めちゃくちゃ恰好よかった。彼らを応援できる嬉しさを感じた」という。応援団長の新谷と二人で応援団を引っぱった影の立役者である。

森元滉大。メンバーには入れなかったが、チームのために自分ができることは何かと考え、竹邉と共に交互でバッティングピッチャーをしてきた。打たせるのもきつい任務ではあるが、ベンチ入りメンバーがいつも「ありがとう」と声掛けしてくれたことに生き甲斐を見出すことができたという。そんな森元は寝坊して大急ぎで学校へ向かうも途中、車にぶつかってしまっ

たことがあった。監督から「寝坊するという気の緩みは、命を大切にしていないということ」と叱られ、草取りを命じられることも。盈進球場を美しく保つための草取りも、今となっては高校野球の思い出の一つだ。

田邉泰成。彼の忘れることのできないエピソードは、多くの選手が恐れおののく盈進の冬練習、通称「浜トレ」と呼ばれるものである。やりきって涙を流す選手もいるほどきつい年末のトレーニングを乗り越え「もう怖いものはない」と語る田邉は、ベンチ入りメンバーを外れたあと、ノックを周りから声で盛り上げるなど様々なサポートに回った。県大会に優勝した時、ようやく達成感を感じ、安堵したというチーム思いの選手である。

光成悠真。三月のリーグ戦で一塁にヘッドスライディングで帰塁するも、逸れたボールに喰らいつこうとした一塁手に肩を踏まれ脱臼してしまった。「手術したら夏は間に合わない」と医者から言われ、夜家で大泣きをしたという。最後の三十人にも残り、夏も練習に入っていたが、おそらくベンチ入りメンバーに入るであろう選手を練習に専念させるため一歩下がる気遣いをしてきたという。「辛いことがあっても仲間がいたから辞めずにやってこれた」。チームの勝利の裏には、選手を思いやる心がいつも見え隠れしている。

森山直哉。ずっと試合に出られなかった。二年生で新チームになった時は、野球をやめるか続けるかを本気で悩み、練習から離脱したこともあった。そうしてグランドから一歩外に出て全員を見渡してみたとき、しんどい練習でも声を出し続けて踏ん張る同級生の姿を目にすることになる。自分の一番しんどい時に声を掛けてくれる仲間たち。野球を続けたのはそうした仲間たちを甲子園に行かせ恩返しをすることにあったという森山。最後の紅白戦で三打数三安打を打ったときの気持ちよさは忘れられない。「自分が野球をやってきたのはこの気持ちを味わいたかったからなんだ」。野球が大好きだった少年時代の思いをもう一度思い出してユニフォームを脱いだ森山に、こうしたチャンスをくれたのも仲間たちだった。

岡﨑颯太。野球の知識が深く、戦略的なアドバイスもできる頭脳派・理論派として監督からの信頼も厚い。そのためベンチ入りメンバーからは外れたがベンチ入りメンバーに帯同し練習を手伝う名簿に名を連ねた。主に相手チームの偵察などを担当しており、ビデオチェックなども中心的にリードしきた岡﨑。自分だってスタンドで仲間たちがプレーしている姿を見たいけれど、チームは自分の情報と分析力を必要としてくれている。広島大会準決勝までずっと他チームの試合を孤独に見続けた岡﨑は常にそうしたジレンマの中で選手と一緒に戦い抜き、選手たちは最後の決勝戦を岡﨑に見せてくれたのだ。まさに「縁の下」と言える岡﨑はチームに欠かすことができない存在だった。

これぞまさに「縁の下」〜マネージャー〜

盈進高校野球部には二人の三年生マネージャーが存在する。いずれももともと野球部選手として入部した生徒である。

平本塁己。もう一人のマネージャーが「表」のマネージャーだとすれば、平本は「裏」のマネージャーである。必ず二人でアイデアを出し合って選手一人ひとり、そしてチームを支えてきた。気を配るということを最も大切にしてきた平本。選手たちの表情に注意して普段と変わったところ、違和感を感じるところがないかチェックし続けた。例えばキャッチボールの際に抜けた球が多い選手がいれば、「肩、大丈夫か」と声を掛け、ランニングの際に足を引きずっている選手を見かければ大きなケガにつながらないように心配したりといった具合にだ。盈進のマネージャーはユニフォームの洗濯をしたり、選手の食べるおにぎりを握ったりすることはない。選手たちが自らやるべきことは選手たち自身でおこなうからだ。その代わり同じプレイヤーの目線から、仲間のいいプレーを引き出すためのサポートはとことんおこなうのである。平本は選手として大成したわけではないが、マネージャー業を三年間継続できたことに大きな誇りと充実感を感じている。

そして最後に、甲子園のマネージャーベンチ入りを平本の方から譲り受けたもう一人のマネージャーがいる。内海太陽。平本が暗がりでも足元を照らす「月」ならば、まさに光を与え続けた「太陽」としてチームを牽引した敏腕マネージャーである。彼こそキャプテン朝生とはまた異なったリーダーシップを発揮したチームの要なのだ。

選手として第一線で活躍していた内海がマネージャーへ転向したのは二

年生の夏、走塁練習で肩を外し手術、完治まで一年を要すると宣告されたタイミングだった。一時は退部し学業に専念する道も考えたが、野球を続けることにこそ意味があるのではないかと思い直した。

内海のマネージャー業は多岐に渡る。アップ前には「今日の練習はこういう意識でやっていこう」、練習終わりには「今日の練習のマイナス面を明日の練習でリカバーしていこう」と常に選手に語り掛け、まさに監督のような存在が仲間にいるという新しい光景を生み出した。

選手に向けて毎日話をするのだから、話題にも気を遣う。野球ボールの紐をほどくと３７９．６㎝だったことから、「ボールを使う競技は大変だ。結果が出ない時もある。でもみなくろう（３７９６）している。この紐が教えてくれるんだから、みんなしんどいことも一緒に楽しくやっていこう」。選手たちが内海の話に素直に耳を傾け、彼らの表情が綻ぶ瞬間である。

メンバーを見つめる観察力にも卓越したものがある。実は僕がこの文章を書き上げるまでの全てのインタビューを内海先輩に同行して頂いた。その都度内海先輩は選手たちのエピソードを引き出して、話しやすい環境を整えてくださった。誰よりも選手たちを見続けて支え続けたマネージャーの存在に、すべての仲間たちが信頼を寄せているのが手に取るように分かった。

そしていざ、甲子園へ

四十八年ぶりの甲子園での活躍を一目見ようと、スタンドを埋め尽くす約三千人の大応援団。僕たちが長蛇をなす入場エリアをくぐり抜けアルプススタンドに到着するとまもなく、試合は開始された。

一回、先発向井が三短長打で四点を先制されると、二回は左翼席に今大会一号となる2ランホームランを浴び暗雲立ち込める立ち上がり。広島大会では見せたことのない失策や判断ミスが続くと、そのたびにスタンドからため息が漏れた。

「とにかく人が多い。これまで全ての大会で外野に人がいなかったのに、周りは見渡す限り人が埋め尽くして、僕らの一挙手一投足に反応がある。甲子園独特の風は見たことのない打球をつくり出し、ゴロもウェーブしてくる」（鶴田談）「どうやって守ったらいいか分からなくなった。イメージが湧かないまま目測を誤った」（山藤談）「異様な空気感。これまでの練習や試合でもかなりの暑さを経験してきたが、それとは何か違う暑さだった」（秋田談）甲子園には魔物がいるというが、盈進野球部も見事にその魔物に憑りつかれていたと言ってよい。

しかしこのままでこの大応援団を帰すわけにはいかない。二回裏に５番山藤、６番中島が連続長打で反撃を開始すると三回は再び山藤が右翼線へ二点二塁打を放つ活躍ぶり。六回、三点差に迫ると大応援団のボルテージが一気に最高潮に。点を取られては取り返す展開という粘り強さを見せた。七点を追う八回裏には三番秋田の二塁打を皮切りに、山藤の右犠飛と中島の左中間への適時二塁打で二点を返すも、反撃もここまで。対戦校を上回る意地の十三安打という反骨心を見せたが、１２対７で初戦敗退という結果となった。

新谷率いる盈進の大応援団はアルプススタンドをえんじ色に埋め尽くし、大熱戦を大いに盛り上げた。三年前コロナとともに高校野球の生活をスタートさせた彼らにとって、ブラスバンドや応援団、チアリーダー、そして在校生と保護者とが一体になった応援は初めての経験であり、人生で忘れられない一日になった。「甲子園のアルプスは一回戦で終わるには勿体ないほどすばらしい応援だった。あの応援はお前の人間性のおかげだ」。のちに新谷が佐藤監督から労われたことばである。

おわりに

盈進野球部は甲子園で山形代表鶴岡東高校相手に終始苦戦を強いられていたが、僕は先輩たちの姿を見ていてどうしても負ける気がしなかった。山藤選手や中島選手の長打に限らず、平凡なゴロやフライでもセーフになるように全力で走り切る姿、ヘッドスライディングをしてユニフォームを真っ黒にする姿、どんな状況でも先輩たちは決して諦めずにプレーし続けていたからだ。負けた瞬間のことを僕は、正直よく覚えていない。ただ一つ確かに記憶していることは、僕はこの日甲子園において、人生で最も大きな拍手をしていたことである。

盈進高校野球部の強さの秘密は何か。それを知りたくて二十八人の先輩たちから話を聞かせて頂いた。その結果分かったこと。それはとにかくこのチームは「仲が良い」ということだった。誰もが本気で野球に向き合い努力を惜しまない仲間が集い、お互いに敬意を抱きつつその努力を連鎖させてきたのである。「すごいと思う選手は誰ですか」という僕の問いに、名前が挙がる選手が一人じゃないこと、強さの秘訣はまさにここにある。佐藤監督も「このチームにスーパースターは存在しない」と話されるそうだが、そうしたチームだからこそ甲子園への重い扉を開くことができたのだ。そして、もう一つ、先輩たちが「仲間と共に自分で考え、行動する」習慣を身に付けていたことも大きなポイントである。先輩たちは僕の質問に対して常に自分のことばで答えてくれた。そのことばの一つひとつにはずっしりとした重みがあったと感じている。

僕も盈進中学野球部でピッチャーをしているが、ピッチャーが立つマウンドというものは孤独だ。少し高くなっているその場所に立つと、まるで大きな山に一人で登っているような、そんな気分になる。勝っても負けてもそこにどんな理由があろうとも最終的に責任を負うのはピッチャーだからである。悩みを抱えがちな僕は、ピッチャーをしていることで辛いことがあっても吐き出せない経験を何度もしてきた。

しかし、このインタビューを通して向井投手も佐々木投手も岡投手も決して一人で戦っていたわけではないことを知った。彼らの後ろには多くのピッチャーが控え、またいつも八人の野手が背中を押してくれているのだ。それだけではない。試合に出る仲間も、試合に出ない仲間も、スタンドで応援するメンバーもマネージャーも、二十八人全ての三年生と後輩たちすべてがいて初めて野球というものができているのだということに改めて気づかされた。

僕の周りにも常に明るく接してくれる仲間がいる。そんな仲間たちと一緒に、一つの勝利めがけて投げることのできる真の「エース」に僕もなりたい。膨大な時間をかけて先輩たちにインタビューをおこない、この文章を書き終える今、そんなふうに考えている。

甲子園から帰ってきた盈進球児を代表して朝生選手がこう締めくくった。「伝統のこのユニフォームで、大好きな野球を、大好きな仲間たちとやれたことはとても幸せでした」。同じユニフォームで戦い抜いた高校三年間。先輩たちは、広島でいちばん野球が上手かったのではない。自分たちの力で信頼と絆がもっとも強いチームを作り、チームとしていちばん輝いていたのだ。僕はそう確信している。

それではゲームセット！

二十八の心ひとつに九つの
場をしめ励むよき仲間たち　（佐伯皆人）

❖インタビューに協力してくださった二十八人の先輩たちを、先輩たちが作った短歌と共に紹介する。（順番はこの文章に登場する順とする）

◆半世紀待ちわびていた甲子園
アルプスに咲く歴代の笑顔（朝生弦大）

◆ツーアウト追っかけた舞台目の前に
気づけば掲げる勝利のメダル（佐々木大和）

◆三年間目指し続けた夢の地の
スコアボードに盈進の文字（岡　謙介）

◆碧い空熱き戦い青春の
勇往邁進ボールに込める　（向井　勇）

◆サイレン音鳴った直後に涙出る
高校野球に今終止符を　（鶴田海斗）

◆坊主にし親元離れ山の上
我の恋人野球だけかな　（秋田浩侑）

◆甲子園支えてくれた人たちが
繋げてくれた出逢いに感謝（杉浦和宏）

◆土壇場で心が揺れて口に出す
ＡＬＬＩＺＺＷＥＬＬきっとうまくいく（山藤龍希）

◆「大丈夫」日々の努力は裏切らない
仲間を信じて自分を信じて（中島知寛）

◆二年半艱難辛苦の連続で
やっと来た夏最高の夏　（西本翔清）

◆コロナ禍で制限多く困ったが
我慢の先に甲子園あり　（平塚颯太）

◆甲子園夢の舞台で堂々と
響き渡せる「盈進」の音（梶岡航士朗）

◆甲子園球児の心また集う
今年の夏も熱き戦い　（西野楓生）

◆甲子園表情も見えぬその先に
大きくうつる君の姿　（新谷　済）

◆三年間高校野球きつかった
それでも一生野球大好き　（奥信武憲）

◆全員で夢の舞台でプレーした
この経験をこれからの糧に　（寺田大和）

◆二回裏臙脂に染まる三塁側
聖地に響く矜れよ盈進　（花岡航大）

◆夏終わり恋しくなったユニフォーム
また着れるかなさらば青春　（佐藤涼生）

◆三年の努力が実った夏大会
スタンドからの熱き応援　（平松拓真）

◆甲子園ベンチ入れずスタンドで
みんなで奏でた最高の音色　（椿　博翔）

◆立っていたアルプススタンド最後の夏
前を向いて全力応援　（竹邉大祐）

◆甲子園スタンドからの叫び声
あいつらに届いているかな　（森元滉大）

◆甲子園球児の気持ちまた集う
今年の夏も熱き戦い　（田邉泰成）

◆まだいけるその声かけが背中おす
きつい浜トレ終われば涙　（光成悠真）

◆つらい中がむしゃらにメンバーへ
みんなでつないだ広島の上　（森山直哉）

◆澄んだ空燃えるえんじとやまぬ声
天まで届け仲間と共に　（岡﨑颯太）

◆何度でも苦しい時期を乗り越えて
最後に変えた盈進の歴史　（平本塁己）

◆白球を握らず終わる今年の夏
蔭の戦力悔いなき青春　（内海太陽）

❖参考文献

復本一郎編『正岡子規ベースボール文集』（岩波文庫）